



毎年開催しております「長崎街道ひなまつり」を今年も開催いたします。毎回多くのお客様に足を運んでいただいているこのイベントは、それぞれの施設で醸し出す雰囲気や展示物が少しずつ違うことが特色です。お時間があれば全館を回っていただくと、より「長崎街道ひなまつり」を楽しめます。

木屋瀬宿・立場茶屋銀杏屋

## 長崎街道 ひなまつり

長崎街道沿い文化施設4館連携イベント



北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館  
運営協議会 広報部会  
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 (〒807-1261)  
TEL 093-619-1149  
FAX 093-617-4949

### ◆長崎街道木屋瀬宿記念館◆

主に「ひなまつり」の歴史や、多様なひな人形の種類についての解説を担っています。4館を回る予定の方は、最初に来館することで、ひなまつりに関する事前知識を付けられるのでオススメです。  
※入館料が必要です。

### ◆旧高崎家住宅(伊馬春部生家)◆

文化財である建物の中に数多くのひな人形が飾られ、どなたが行っても楽しめます。飾られているひな人形の中には江戸時代に制作されたものもあるので、ぜひ探してみてください。

### ◆江戸あかりの民藝館◆

館長の佐藤氏によって収集されたひな道具の展示を行っています。実際の道具をつくる職人によって手掛けられたひな道具は一見の価値があります。平日休館のため、土日祝にお越しください。

### ◆立場茶屋銀杏屋◆

段飾りとさげもんが、文化財である建物と調和して非常に趣深い展示となっております。独自に制作された、小さな人形が竹の中にある「竹ひな」、等身大の内裏ひなである「大名ひな」の他、江戸時代のひな人形も展示しています。

※各施設で会期、休館日、入館料などが異なりますので、ご注意ください。

令和8年 春期 イベント案内

●企画展『こやのせ画文集 瓜田惇二淡彩画個展』  
会期：4月25日(土)～6月21日(日)  
会場：長崎街道木屋瀬宿記念館 みちの郷土史料館

●『木屋瀬座落語会』  
日時：4月25日(土) 会場：こやのせ座

●『木屋瀬芸術祭』  
会期：5月3日(日祝)～5月5日(火祝)  
会場：こやのせ座、木屋瀬宿場内各地

こやのせ 宿場町木屋瀬。心に郷土が染みしてくる。歴史とふれあう記念館。

令和7年12月6日(土)・12月7日(日)に、8名の児童による令和7年度「子ども魚びす頭」が執り行われました。この行事は、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒あるもので、古くは男児が数え年で11歳になると「頭(かしら)」と呼ばれ、地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として始まりました。現在では小学校4年生の男女を頭とし、執り行っています。

11月中旬から太鼓・采振りの練習を始めました。最初はほとんどできなかった子どもたちが、柳勝二氏をはじめ、木屋瀬青年会や地域の方々の大変熱心なご指導の結果、本番ではしっかりと太鼓・采振りを行うことができ、子どもたちの成長に感心させられました。当日は多くの加勢人にご参加いただき、笹山車の巡行などを通して、練習で頑張った成果を地域の皆様に披露することができました。



## 令和7年度 子ども魚びす頭

子どもたちは、木屋瀬の伝統行事を経験したことで、故郷を愛する気持ちやこの先の困難を乗り越えられる力を育むことができたと思います。

私も子どもの頃、この行事に参加しました。今回は親として、この行事に関わらせてもらう中で、木屋瀬町内の皆様の地域を想うことや、この地域で暮らす子どもたちの健やかな成長を願う心が、昔から変わることなく引き継がれていることの素晴らしさを再認識する良い機会となりました。

結びに、この行事の準備から本番までご協力いただきました氏子総代会をはじめ、木屋瀬町内の皆様方、また、ご芳志をくださいました皆様方に令和7年度子ども魚びす頭の関係者を代表いたしまして、心より厚く御礼申し上げます。

世話人代表 金子雄貴

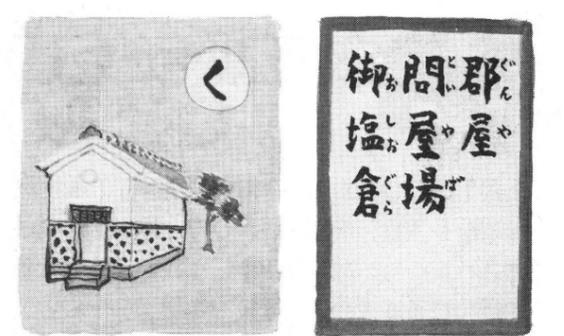
## お お宮の 大盃 七升入り

お宮とは永享元(1492)年の頃より当地に鎮座すると伝えられる須賀神社でございます。この氏神様(産土神)にはお神酒が七升入ると云う朱塗りの大杯が奉納されています。



## く 郡屋 問屋場 御塩倉

宿驛往時、木屋瀬宿には郡の事務所を預かる郡屋という施設、人馬の継ぎ立てをする問屋場(駅亭)という施設があり、また、統制品であった塩の管理も行われていたようです。



「ひろば北九州」に連載されておりました、紅屋泰助氏(故 柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記」内、木屋瀬いろはかるたについて紹介・引用させていただきます。

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。 ホームページ ▶ <https://koyanose.jp>

**勉強会と新年会**

私たちは毎年1月第3月曜日の勉強会の日、新年会をしています。会場はいつもの中町公民館、ここは飲食自由な地域公民館です。今年は1月19日10時から勉強会を先にして、11時から新年会になります。勉強会では、「長崎街道・筑前六宿」について史料を読んでいきます。筑前六宿街道は、五街道（東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道）につぐ脇街道首位の中国路相当であったと知られています。長崎街道が長崎から佐賀を通って福岡に入る時、県内の原田、山家、内野、飯塚、木屋瀬、黒崎の六つの宿場を筑前六宿といいます。福岡藩領内の六筋（街道）は、①長崎街道、②唐津街道、③秋月街道、④日田街道、⑤篠栗街道、⑥三瀬街道です。

**黒崎宿**：1600年、豊前中津から筑前に入部した黒田長政は福岡城の築城と並行して、1604年豊前との国境に六つの端城を築きその一つが黒崎城。重臣井上周防之房が在番し、藤田村、熊手本村を立てたのが黒崎宿の成立。しかし、1615年一國一城令で黒崎城は破却。けれど、藤田・熊手一带に商業集落、湊に旅船荷会所などが整備される。町茶屋（脇本陣、関屋、八幡屋）のほか、桜屋（薩摩屋）など



**山家宿**：諸大名などの福岡城下町内の通行を嫌った福岡藩主の命で、山家の初代代官桐山丹波信行が地元の家臣らと冷水峠に道を開くために、1611年山家宿を起立。そして長崎街道が開設。長崎街道に日田往還と薩摩街道が交わる構口は、石垣の上の白壁塀に瓦屋根を葺き、たいへん貴重。原田宿・肥前と筑後から筑前に入る国境の街で関（口留）番所が置かれる。1638年島原の乱鎮庄の総指揮者松平信綱ら1300人あまりが冷水峠を越えて原田に宿泊。既に宿場ができていた。

**第3回 みちの郷土史料保存会 活動報告**

木屋瀬みちの郷土史料保存会  
会長 高倉照男

**木屋瀬いろは歌留多大会を開催しました!**

1月12日（月祝）に、木屋瀬の新春の風物詩である「いろは歌留多大会」を開催しました。木屋瀬の発展のため生涯尽力されました、故岩尾四十三郎氏が制作した歌留多を使用して行われる本大会は、今後も木屋瀬の歴史と文化を後世へ伝えるための重要なイベントとして、地域で大切に受け継いで参ります。



**文化の薫る町木屋瀬**

**第十五回 最終回 木屋瀬宿街づくり物語(後半)**

街づくり団体、「宿場木屋瀬街づくり」の会は、平成3年には「宿場シンポジウム」平成4年には「伊馬春部生家復元キャンペーン」を開催しました。平成5年のイベントについては、街づくりの会の中で、いろいろな議論がされ、木屋瀬の代表的文化芸能である、「盆おどり(宿場踊り)」を中心としてお祭りを開催することを決めました。タイトルは「皆で踊ろう 宿場まつり」となり、住民みんなが踊ることによって木屋瀬の文化である盆踊りの継承を図り、徳島の阿波踊りや郡上八幡の祭りのように、大きな祭りになることを夢みて企画しました。



当初心配であった、踊り子が集まるか、街道の使用許可が下りるか、その他衣装等、いろいろな問題もありましたが、無事に解決して開催にこぎ付け大成功を収めました。当時の市長も浴衣を着て参加されました。この成功により、「宿場木屋瀬街づくりの会」が行政の信頼を得て、念願であった現在の記念館の建設に目途がついた。

「宿場祭り」は、第8回まで宿場木屋瀬街づくりの会が主催で開催していましたが、祭りも大きくなり、とても一団体では対応できる祭りではなくなったため、木屋瀬全体で対応すべく、各種団体が集まり、実行委員会を結成するようになりました。

これまで運営を続けてくれた、多くの人々の努力のお陰で、昨年の開催で第31回目を迎えることができ、木屋瀬最大の祭りとなりました。

踊らしてみましたがや盆の月  
柴田 一方

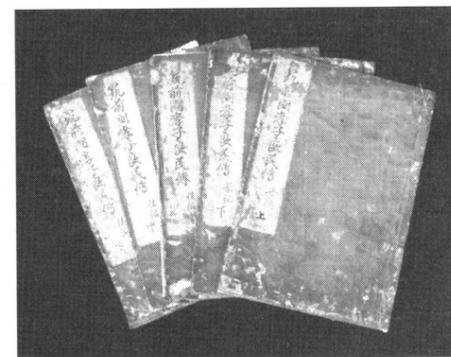
宿場木屋瀬街づくりの会 前会長 野口靖彦

**木屋瀬宿記念館 収蔵品紹介**

**筑前国孝子良民伝**

(ちくぜんのかくにこうしりょうみんでん)

筑前国孝子良民伝とは、寛保2年(1742)に福岡藩の儒学者である竹田定直(たけださだなお)によって編まれた筑前国の孝子説話集である。木屋瀬からも2名のエピソードが商家の町屋のようすが分かる挿絵とともに書冊に収録されている。



紹介されたのは木屋瀬宿の弥二兵衛(やじべえ)と清一(せいいち)であり弥二兵衛は船庄屋・梅本家の出身で、享保壬子の年の大飢饉(1732)の際、自身の力及び限り雑穀を必要な人々に与え、寺には銀1枚を書付なしで包んで渡すなど、仁愛深い人物であることが記されている。また清一は、貧賤の身ではあるものの、家の中を歩行するのも困難なほどに老いた母に対し、献身的な介護を行ったことや自身が妻帯者となっても介護を妻に任せることはなく、雇われて隣村に行く際にも必ず帰宅し、母の面倒を見続けたことが評価され、米を賜ったとされる。

(長崎街道木屋瀬宿記念館 学芸員 加藤 悠)